

実践報告 11

「書くこと」のパフォーマンステストと評価

愛知県立幸田高等学校 教諭 戸田 康弘

1 はじめに

いわゆるパフォーマンステストというと、「話すこと」に主眼がおかれることが多いが、5領域の一つ「書くこと」についてのパフォーマンステストに結びつける授業実践を行った。その際のルーブリックの評価項目の設定の在り方、また、「主体性」をどのように評価に加えていくかについて考察した。

2 単元の目標と言語活動

(1) 教材

ア 教科書：Vision Quest English Expression II Hope（啓林館）

イ 単元：Lesson6 This is a photo taken in Vancouver.

(2) 単元の目標

さまざまな方法で名詞を修飾することができる。

3 関係する領域別目標（学年のCAN-DO）

聞くこと	さまざまな主題，時事問題に関する対話等を聞いて，その概要を適切に捉えることができる。
読むこと	さまざまな主題，時事問題に関する対話等を聞いて，その概要を適切に捉えることができる。
話すこと [やり取り]	発表された内容を踏まえて自分の意見を簡潔に理由も含めて述べるができる。
話すこと [発表]	学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどをまとめ，基本的な表現で発表することができる。
書くこと	設定された主題について，さまざまな文章を意見を踏まえて書くことができる。

4 単元の評価規準（五つの領域ごとの評価規準の設定）

評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話すこと [やり取り]		発表された内容について，質問や，自分の意見を言っている。	発表内容について理解しようと努め，積極的に質問，発話しようとしている。

話すこと [発表]	後置修飾（分詞・関係詞・前置詞句）を効果的に使い、物事の説明をしている。	相手に発表内容が理解されるように、伝え方を工夫している。	相手に発表内容が理解されるように、伝え方を工夫しようとしている。
書くこと	後置修飾（分詞・関係詞・前置詞句）を効果的に使い、設定された主題について説明する文章を書いている。	設定された主題の描写が適切になされている文章を書いている。	よりよい文章を書こうとしている。

5 言語活動を中心とした指導と評価の計画

時間	ねらい、学習活動	評価の観点			指導上の留意点 評価規準（評価方法）
		知	思	主	
1 ～ 4	【ねらい】 名詞を修飾する方法（主に後置修飾）を学ぶ。 【学習活動】 教科書に準拠したワークシート	○			・ワークシートにより理解度を確認する。
5	【ねらい】 指導した内容を踏まえ、写真を説明する正しい英文を書けるようにする。 【学習活動】 発表とパフォーマンステスト	○	○	○	・パフォーマンステストは授業時間内に制限時間を設けて行うが、その前に生徒が書いた文章を添削し、数回書き直す指導を行う。 ・写真の説明をペアで数回させた後、パフォーマンステストを実施する。

6 パフォーマンステスト

(1) 実施方法

各自で用意した「思い出の写真」について 60 語程度の英文を書く。

(2) 指導上の留意点

パフォーマンステストでは時間を設定しその中で書かせるが、テスト実施までに何度か書き直させ、添削指導する機会を設ける。

7 ルーブリック

(1) 評価方法

パフォーマンステストで生徒が書いた作文を回収し、ルーブリックを基に教員が採点する。パフォーマンステスト実施前の書き直しも評価の対象とする。

(2) 評価の領域（内容のまとめ）：「書くこと」

評価	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価 規準	学習した後置修飾（分詞・関係詞・前置詞句）を正しく効果的に使えている。	まとまった分量の英文で、思い出の写真に写っている人物などの描写が適切になされている。	パフォーマンステスト当日までによりよい文章を書こうとしている。
a (5点)	学習した後置修飾を英文の中で2箇所以上正しく効果的に使えている。	60語以上の英文が書け、写真の描写だけでなく、その時の気持ちやその写真が撮られた背景など、より深い内容も書かれている。	添削された内容を基に書き直したものを提出する指導を2回以上受け、よりよい英文を書こうとしている。
b (3点)	学習した後置修飾を英文の中で1箇所正しく効果的に使えている。	54語以上の英文が書け、写真に映っている人物などを英文で適切に説明できている。	添削された内容を基によりよい英文を書けるように、書き直したものを提出し指導を受けた。
c (1点)	学習した後置修飾を使うことができていない。	英文の語数が53語以下で、写真の内容を十分に説明することができていない。	添削されたものを基に書き直したものを提出しようとしなかった。

※「おおむね満足できる」状況をbとする。

8 実践報告

(1) 実践の内容

まず、教科書に準拠したワークシートで学習、問題演習を行い、知識・技能の定着を行った。Lesson 6で扱う文法項目は分詞、関係詞、前置詞句を用いた名詞の後置修飾である。単元の学習が終わった後、生徒各自が持っている思い出の写真を一枚選び、それについての説明の文章を書かせるパフォーマンステストを実施することを伝えた。生徒への指示は以下のとおりである。

- ① 思い出の写真について説明する「書くこと」のパフォーマンステストを行う。
- ② テスト当日は、英文を書く際にその写真を見てもよい。
- ③ テストまでに、1週間程度の添削の機会を設けるので、積極的によい文章が書けるように努力する。この努力する姿勢も評価に加える。
- ④ 書き上げた英文はルーズリック（7(2)参照）に基づいて、評価する。

パフォーマンステスト当日までに書かせたものを一度添削し、アドバイスを与えた上で、評価に加えることを確認し、書き直しをさせた。全ての生徒が、書き直したものを1回は提出することができた。その上でもう一度添削して返却した。英語力に不安をもっている生徒は2回目の提出をした。このような生徒は12名中3名にとどまった。

パフォーマンステスト当日は、テスト前に、ペアで写真を見せながら、本日書く内容をお互いに口頭で発表させた。テスト前の最終確認の意味合いで行ったが、生徒は積極的に伝えようとし、リラックスした雰囲気を作ることができた。その後、写真と筆記用具以外のものをしまわせ、パフォーマンステストを行った。制限時間は5分に設定した。

(2) 実践の結果

本校理系コース 12 名のパフォーマンステストの結果は以下のとおりであった。

※ a … 5 点, B … 3 点, c … 1 点に換算

	知・技	思・判・表	態度	合計
生徒 A	5	5	3	13
生徒 B	3	5	3	11
生徒 C	5	3	3	11
生徒 D	5	5	3	13
生徒 E	3	3	3	9
生徒 F	5	1	5	11
生徒 G	5	3	3	11
生徒 H	5	1	5	11
生徒 I	3	5	3	11
生徒 J	5	5	3	13
生徒 K	5	5	5	15
生徒 L	3	3	3	9
全体	4.3	3.7	3.5	11.5

(3) 考察

「知識・技能」の観点の評価項目は、ルーブリックに示したとおり、単元の学習項目である後置修飾が正しく使えているかに絞った。スペルミスや、その他の部分における文法のミスは返却の際に指導はするが、評価には加えないようにした。このようにすることで、「何ができるようになっていればよいか」を採点者にも生徒にも明確にすることができた。生徒は後置修飾に焦点を当てて学習することができたようで、この観点の平均点は他の観点よりも高くなった。また、本校の場合は教科担当が受けもつ授業が 1 クラスで、しかも少人数であったが、複数で人数の多いクラスを評価する際は、単元目標や生徒の学力に応じて何を評価するかを明確にすることが評価の客観性を維持するために大切かと思われる。

また、「主体的に取り組む態度」の評価項目に添削回数を入れたため、英語が苦手な生徒も添削指導を受けたことにより、三つの項目の合計ではそれなりの評価を受けることができた。苦手な生徒にとっては自分で考えた英文であってもそれを覚え一定量の英文を書くことは難しい。実際、生徒 F・生徒 H は本番では十分な分量（60 語の 9 割の 54 語以上を「思考力・判断力・表現力」における b 評価に設定）を書くことができなかったが、事前の添削指導の回数が多かったため、必然的にこの項目の評価が高くなった。しかしながら、英語が得意な生徒、すなわち、教員からの添削指導があまり必要でない生徒は、生徒 A、生徒 D、生徒 J のように他の項目が a 評価であっても、「主体的に取り組む態度」で b 評価となり、ほぼ完璧な英文を書けても満点の評価に至らなかった。「主体的に取り組む態度」をどのような点で評価し、その評価にどのように客観性と妥当性をもたせるかは今後研究を進めるべき課題であると感じている。